第 24 号　2011. 4

आयुस: あーゆす

〈発行〉　京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槙島町千足80

研究と学習

京都文教大学図書館長
現代社会学科・教授（経営学・組織論）渡　辺　　峻

大学教員歴が長くなるにつれ、おのずと他人の「論文」を読む機会が増加するのは一般的な傾向である。その場合、自分の興味と関心に基づき主体的に読むのとは別に、審査・評価・採点のために「読まされる」ケースも少なくない。後者については、博士学位論文や修士論文を指導教授・審査委員として読む、学会機関誌への投稿論文をレフリー（査読者）として読む、また学部生の「卒業論文」をゼミ指導教授として目を通す場合など様々である。私的経験を言えば、加齢とともに「読まされる」ケースが増えてきた。

この40年間を振り返ると、かつての修士論文や卒業論文は結構レベルが高かった気がしている。「修士課程の大学院生でもここまでやるか」「学部生にしてはたいしたものだ」と唸ったことは、たびたびあった。しかし最近20年間は、その種の感動をする機会がめっきりと減少した。その要因は別途詳細な分析が必要であるが、少なくとも言えることは、現実の社会・自然と格闘し知的好奇心を持って深くモノを探究する院生・学生が減少したからではないか。

そこに共通する特徴は、思考が直截的・断片的・表面的であり、その結果、見たまま聞いたままを記述して得意になる「論文」が登場する。もちろん、自分にとって、これまで知らなかったことを知ったのであるから「得意」になるのも根拠はあるが、これはただ自分の無知が克服されて賢くなったというだけのことであり、社会的な意味は皆無である。この種の「記述」は、いわば個人的な備忘録であり、学習ノートであり、研究対象の素材の集積箱でしかない。

その断片的・偶然的な諸現象・諸事象を調査・分析・総括して、そこに一定の法則性・傾向性・本質的特性を発見することが研究であり、それを過去の先行研究の到達点を踏まえ、それぞれの学問的パラダイムに即して、系統的・体系的に記述するのが研究論文である。したがって、そのような知的な営為は、社会的な行為であり、知的社会貢献活動である。それゆえにこそ研究の喜びがあり、楽しさがあり、そこに研究者としての生きがいがある。

もし見たまま聞いたままが真実であれば、毎日、太陽は東の空から昇り西の彼方に沈むのであるから、太陽は地球を中心にグルグル回る天動説になるが、その種の非科学性は小学生でも知っている。見たまま聞いたままが真実でないから、そこに学問研究の役割があり、大学の社会的な存在意義があるのだろう。

今、いくつかの大学院の教壇から、しばしば大学院生に学習と研究の差違を説いているが、「コピー・貼り付け」を「卒業論文」と信じる学部生たちには、一体何を言えば良いのだろうかと、最近、途方に暮れてしまった。

（わたなべ　たかし）

アイガー

京都文教短期大学図書館長
幼児教育学科・教授（造形表現）　津　田　直　樹

真夜中である。空は満天の星、８月なのに恐ろしく寒い。私は今、電話ボックスの中にいる。電話を掛けているのではない。ここはスイス、インターラケン。アルプスのモンブラン、マッターホルン、ユングフラウを臨み、野には色とりどりの草花が咲き乱れ、梨や林檎や杏は沢山の実をつけていて空は青い。ここには裾野から山頂までに春夏秋冬が存在する。私は今朝早く、登山電車でユングフラウヨッホへ行き、猛吹雪に出合ってグリンデルワルドまで下りてきて、アイガー北壁を近くに仰ぎながらスケッチブックを広げて時を忘れていた。切り立つその岩肌は勇壮であり非情であり、並び立つ白い衣の天使の輝きを放つユングフラウとは異なる神々しさを放っている。夢中で写生した。大自然に畏敬の念と恐れを抱きながらも、この力強さに負けてはならない。この美しさに負けてはならない。

ソビエトの船ではナホトカ港の写生を全部没収されていてスケッチブックにはシベリア鉄道の車窓から描いた白樺の大地の１枚だけが残っている。モスクワでは１枚も写生する気は起こらずヨーロッパに入って、これが初めての写生であった。

アイガーを描き終わる頃、もう手の先は寒さで痺れていた。辺りの白い山々のせいか、明るさの割にはかなり時が過ぎていたようでいくつかのホテルを当たったが何処も満員だった。私は慌てて最終電車に乗り、ここ終着駅インターラケンにたどり着いたのだ。夜も遅い、私は仕方なく建物の裏通りを歩いて塒（ねぐら）を捜した。有った。沢山の段ボール箱がころがっている。私はその一つ一つを積み重ねて砦を作り、箱の中に入って野宿と洒落込んだ。リュックを枕にして凍るような星空を眺めていると師の言葉が思い出された。歩いて見つけろ。私は今から三年前、日本画家池田遙邨の門をたたいていた。師は歩きの中で森羅万象と語り、生きる悦びと夢を描いて漂泊の画家と呼ばれていた。そして写生の鬼でもあった。私のこの旅は画家への第一歩でもある。突然、私の砦が飛び散り懐中電灯が２個光って二人の男が怒鳴った。ドイツ語である。言葉は分からないが判断はできる。私は日本人であり画家であると日本語で応え、彼等は黙って立ち去った。私は蓑（みの）をはがされた虫状態で、砦の残骸をそのままにして、駅の方へ戻ると駅舎は閉まっているが、しめた！何故もっと早く気がつかなかったのだろう。

私は今、快適な箱の中にいる。ここは分厚い扉を開けて中から閉めると軽くボンと音がして温かい。広さは日本の電話ボックスの1.5倍。底が抜けてないからすきま風は入らず、扉の取っ手は丸い穴が空いていて新鮮な空気が流れ込む。おまけに電話帳ならぬ本が読めるほどの明かりが灯っていて、私は時刻表をめくった。チューリッヒからオルテンへの列車を確認してリュックに目をやる。その中には、私が日本で描き上げて持ってきた日本画６号が３点入っている。無鉄砲な私の旅の始まりだ。夜が明けたらこれをひっさげてオルテンの町へ行く。これは画廊のオーナーへの挑戦状である。

（つだ　なおき）

科学論文病の恐怖

臨床心理学科・准教授（健康科学・運動疫学）　長　野　真　弓

昨年４月に数少ない自然科学系（健康科学）の教員として本学に赴任してから、はや１年が経とうとしている。今回、執筆の機会をいただいたこともあり、自身の読書生活について感じることをここで少し書かせていただきたいと思う。

研究というものを生業にして以来、いやおうなく活字を読む量は増えた。しかしながら、その内容といえば、自身の研究に関わる先行研究をまとめた書籍や科学雑誌の論文ばかりである。自然科学系の研究を長年続けていると、日々科学雑誌で公表される最新情報を仕入れることにばかり関心が向いてしまう。しかも、お決まりの言い回しで事実に基づく意見を淡々と述べる科学論文では、情感豊かな文章表現はむしろ邪魔なものとみなされる。その中で自分の思いを表現するには、データを示し、それに基づいてものを言うしかない。根拠のない考えを述べると、「何を根拠にこのようなことを？」と、突っ込まれるのがオチである。何ともお恥ずかしい話であるが、文系大学である本学に来て初めて、科学論文の読み過ぎで自身の感性が毒されていることに気付いた。言い訳がましいが、大量の仕事に忙殺されるうちに、自身の心に潤いを与え、人間の幅を広げる文学的な本を手にすることがめっきりなくなってしまっていたのである。それを思い知るきっかけとなったのが、先日、某所から依頼されたエッセイであった。A4一枚半のエッセイを書くのに何と半日近くを費やしてしまい、高校まで国語・古文・漢文を得意とする典型的な文系人間だった私としては、かなりショックを受けた。もちろん、文法に則った日本語は書ける。しかし、「自分の思いを素直に綴る」ことがなかなかできなかったのである。何とも恐ろしい事態ではないか。京都文教大学にご縁をいただき、図らずも図書館・情報委員というお役目にあずかったのも、このような自分に気づくためだったのかしら…と半分は冗談っぽく、でも半分は真剣に思っている今日この頃である。

さて、そうはいえども、私にだって読書に没頭した時期は確かにあった。最も人生でたくさん本を読んだ時期は、小学生時代だったろう。幼少の頃に病弱だったということもあるのだが、今思えば、この仕事につく布石だったのかと思えるような本ばかり読んでいる。印象深いのは、動物を主人公にした童話を情感豊かに描いた児童文学作家「椋鳩十」やイギリス出身の博物学者「アーネスト・T・シートン」の作品。いずれも、細やかな視点で動物たちの営みや人間との関わりを生き生きと描き、生物ひいては命への興味を持つ大きなきっかけとなった。そして、学校図書館の蔵書すべてを読破した「江戸川乱歩」の推理小説シリーズ。早く結末を見たいという衝動を抑え、謎を解く鍵を夢中で考えた。さらに、10歳の頃に親からプレゼントされた「世界不思議物語」という外国の作家の訳本。超常現象や大自然の謎など、探求心を擽るありとあらゆる世界中の「謎」を子ども向けに紹介し、ささいなことに「なぜ？」と思う現在の思考回路に多少なりとも影響を与えていると思う。実家の転居で紛失していたのだが、先ほど、もしやと思ってネットで検索してみたら、まさにプレゼントされた当時の初版を発見し、懐かしくて早速購入してしまった。配達が待ち遠しい。

とにもかくにも、これからは、いつの間にか発症していた「科学論文病」を治すため、努めて自分の専門とは全く関係のない本を読み、錆びていた感性を磨き直したいものである。

（ながの　まゆみ）

私のすすめる３冊

食物栄養学科・教授（生化学・食品栄養学）　村　上　俊　男

『生物と無生物のあいだ』

福岡　伸一著／講談社

分子生物学者である著者が、専門的な内容を、比喩を巧みに織り交ぜながら解かりやすくかつ魅力的に解説した本。「生物（生命）とは何か？」という命題を、自身の研究や先達の業績をたどりつつ追求し、生命の輝き、命あるもののすばらしさを教えてくれる。特に、生命がパーツの集合体ではなく動的な存在であると認識される過程が印象的で、後年の大作(？)である『動的平衡』（木楽舎刊）にも繋がっている。研究のドラマティックさも垣間見れ、理系だけでなく文系の人にも是非読んで欲しい。

『いつまでも「老いない脳」をつくる10の生活習慣』

石浦　章一著／ワック

生化学者で、一時期私と同じ釜の飯を食った同僚でもある著者が、最新の成果（科学的データ）を背景に説得力のある文章で「老いない脳を作る生活習慣」をまとめた本。しかも、単に生活習慣を改めることに言及しているだけではなく、活性酸素のこと、脳と運動やストレスとの関係などからのアプローチもされている。特に、自分の好きなことをやって報酬を与えると脳が活性化するというくだりが特徴的。一見、中高年向きの内容ではあるのだが、最近、考える（脳を使う）ことを楽しまない学生が目につく中、警鐘を鳴らす意味で薦めたい。

『伝える力－「話す」「書く」「聞く」能力が仕事を変える！』

池上　彰著／ＰＨＰ研究所

いま話題の著者のベストセラー本。ビジネス新書であり、ビジネスパーソンを念頭に置いたと断ってはいるが、「話す」「書く」「聞く」能力が仕事を変える！との副題通り、“わかりやすく伝える”ための基本スキルが書かれているので、若手の社会人のみならず学生には一読の価値あり。３つの行為はまさに「コミュニケーション」で、その能力は現代人に必須でしょう。目新しいことが満載というわけではないが、当たり前で見落とされがちな「伝え方」に気づかされる。

（むらかみ　としお）

『読むことと書くこと』

ライフデザイン学科・教授（コミュニケーション論）　森　川　知　史

小さい頃から本が好きだったわけではない。もっぱら絵ばっかり描いている子どもだった。それが中学１年生の夏休み明けに、提出物のひとつとして「お化けの話」（タイトルは忘れた）を書いていったのがきっかけで、文章を書くのが好きになった。国語の先生が教室で読み上げてくれて、誉めてくれたからだ。

無論、そんなものを書こうと思い立ったのには、その前に読んだ小説が刺激になったのは間違いない。エドガー・アラン・ポーの『黒猫』か何かだったように思う。それがきっかけで、詩や小説を読んだり書いたりするようになった。相変わらず絵は描き続けていたが、文章にも面白さを感じるようになり、自分自身の微妙な内面を描写するのが楽しくなった。思春期の憂鬱などを描写しながら、ブルーな表情を浮かべているのが格好良く思えたりもした。高校生の頃にはいっぱしの文学少年を気取っていた。その頃は、ドストエフスキーが好きで、『地下生活者の手記』が最もお気に入りだった。

やがて、単なる物語を書くのに飽き足らなくなり、複雑な心理描写を連ねた長編を書くようになった。原稿用紙300枚の小説を書き上げたこともあるが、枚数ばかりで、内容の出来具合は大したことはなかったように思う。また、高校２年生頃から哲学の本が好きになり、時代や国を問わず、いろんな哲学書を読みあさった。われわれは、どこから来てどこへ行くのか、生きている意味は何か、時間の流れが内面のあり方によって変わるのはなぜか、等々、つまりは小説を読んだり、書いたりする心理とつながっていたように思う。

大学３年生になった頃から、日本語学の論文を読むようになり、論文のまねごとのようなものも書き始めた。卒業論文は120枚。80枚の副論文も付けた。大学院の６年間は読むのも書くのも論文が中心になったが、それ以降20年近く短歌会に属して短歌創作も手がけたので、短歌雑誌に名前が載るのは日常のことだった。

大学の教壇に初めて立った年に、大学のテキストを書いてみないかという誘いを受けた。『国語の表現』という本のほんの数ページを執筆しただけだが、厚表紙の本の最後に自分の氏名が載ったのは、妙に晴れがましく思えた。

それ以降は、専ら紀要論文を書き、自分の文章が活字になって出ることには慣れた。やがて数名で共著の本も出すようになったし、今では自分一人で１冊の本も書くようになった。原稿用に500枚や1000枚は、さほど厄介ではない。むしろ、短くまとめる方が苦労する。短い文章の方が内容の出来・不出来が鮮明になる。

ある程度まとりのある大部な本を読んだり、書いたりすることは楽しい。上中下３巻の本を買ってきて、上巻の最初のページを開けるときのワクワク感は、格別だ。あるまとまった文章を考え考え執筆していくときの、頭の動きが大好きだ。何章にもわたる文面の組み上げがうまくいかず、何日も同じところを堂々巡りしているときの焦燥感は、決して楽しいものではないが、それがどこかでうまくいくようになって、出口が見え始めたときの達成感は何とも言えない。

大学院生の頃、読むのも書くのも論文が中心だったと書いたが、市販の雑誌のいくつかに小説が載ったことはある。出版社から、読者の感想文というものを送ってもらったこともある。その頃を思い出すと、その私小説的内容は若気の至りだったように思うし、その文章を今さら読んでみたいとも思わない。今なら少しはましな小説も書けるように思えるのだが、あるまとまった長さの小説を書くには、その情熱や根気が、今では失せてしまっているように思う。

大学の教壇に立ちながら、詩や小説を書くというスタイルに憧れていた頃もあったが、現実には未だ果たせずにいるわけだ。今日までに書いたのは、詩でも小説でもなく、テキストや論文や教養書と20年分の短歌だ。絵も本格的な油絵は長い間、描いていない。教壇から降りるときが来たら、詩も小説も絵画も、じっくり腰を落ち着けて書いて（描いて）みようかな。

（もりかわ　としふみ）

選書ツアーに参加して

家政学科食物栄養専攻２回生
猪原明日香、澤田尚子、大町翠里

私たちは、今回２回目の選書ツアーに参加しました。１回目に参加した時にとても満足できたので、今回も参加することを決めました。今回は１回生の参加者が少なかったので、次回は是非たくさんの人に参加してもらえると良いなと思います。自分の興味のある本でも、高くて買えなかった本を選んで買ってもらえるので、選書ツアーにはとても魅力を感じます。一人３万円ちかい金額の本を選ぶのは大変ですが、普段できない経験なのですごく楽しいです。本が好きなので、選書ツアーが毎回楽しみです。私たちが選書ツアーで見つけた本の中からオススメの本を紹介したいと思います。

まず始めに『折々の京ことば』を紹介します。なぜこれを選んだかというと、生まれも育ちも京都なので、今まで京ことばについて深く考えたことがありませんでした。それどころか、あまり京ことばを好きと感じたこともありませんでした。しかし、この本を読んで、京ことばの面白さや深さに気付くことができました。京都に住んでいるので今まで気付きませんでしたが、いつも自分が標準語だと思って使っていた言葉も、京都以外に住んでいる人には伝わらない京ことばだったことに驚きました。京ことばは、難しくてややこしいです。やわらかく物事を言うので、「結局何が言いたいのかわからない」と他の地方の方は、要点をはっきり言わない京ことばにイライラされるかもしれません。しかし、それは京ことばの良いところでもあるのです。京ことばのふわっとしたイントネーションや話し方に、優しさを感じることが出来ると思います。京ことばは、相手を傷つけないように言葉を丸くした言葉なのだと感じました。しかし、このような京ことばはあまり使われなくなってしまいました。この歴史ある言葉を私は残していきたいです。実際に京都に住んでいても、知らなかった言葉がたくさんありましたが、この本を読むことによって知ることができました。この本は京ことばの魅力がたくさん詰まっているので、京都に住んでいる人も、そうでない人も楽しめると思います。

次に紹介するのは『ランチパックの本』です。みなさんも一度は食べたことのあるヤマザキのランチパックを厳選して紹介している本です。なぜこの本を選んだかというと見たこともないランチパックが多く紹介されており興味を惹かれたからです。1984年にランチパックは誕生しました。そのころは４種類だけでしたが、年間50種類もの新作が登場しては消えていく繰り返しで、現在までに累計で800種類もの商品が売り出されたようです。発売当初はすべてスイーツ系であったようですが、現在ではお惣菜系のものも多く、人気があります。ランチパックは、コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどの身近なところでよく目にし、なおかつ昼食などでよく食べられています。しかし、この本には見たことのないようなものもたくさん掲載されています。季節限定のものや地域限定のものがたくさんあるようです。厳選された50もの商品の特徴や味、パッケージなどが細かく書かれ、読んでいて楽しくなってきます。

この様に私たちが選んだ「何でもないような本」ですが、選書ツアーではいつもと違う気持ちで読んでいました。多くの人に少しでも興味を持ってもらえればいいなって思いながら、自分自身も気軽に「本」を楽しむことが自然に出来るようになったと思えました。今更ながら「読書」の第一歩は好きなことをより楽しく学ぶことであると再認識できました。選書ツアーは素敵な時間でした。皆さんもこんな素敵な時間を過ごされてはいかがですか。

（いのはら　あすか）
（さわだ　しょうこ）
（おおまち　みどり）

『折々の京ことば』
堀井令以知著／京都新聞出版センター
『ランチパックの本』　香山哲著／アストラ